

## [特別講演会]

# 外資系企業で活躍する 公認会計士

### ～監査法人から転身、その魅力と可能性～

去る8月28日(日)、「資格の大原」東京水道橋校で大手監査法人勤務から外資系企業に転身し現在活躍されている公認会計士・久保寺大悟氏の講演会「外資系企業で活躍する公認会計士」～監査法人から転身、その魅力と可能性～が開催されました。今月号では、その講演会をダイジェストでお届けします。



## 「挑戦することで 可能性は広がる」

皆さんこんにちは。久保寺と申します。本日は私のこれまでの経験をもとに、「公認会計士の魅力」「外資系企業で働く魅力」「一般の事業会社で働く組織内会計士の魅力」についてお話しします。よろしくお願ひします。

公認会計士試験(旧2次試験)合格後、大原で1年間講師をした後に大手監査法人に入所しました。そこでは主に国内の法定監査をしていました。この時代を振り返ると、とにかく勉強になったと思います。若いうちから大企業に出入りし、経営や管理の仕組みを見ることや最先端の会計に触れることができました。それまでたくさん試験勉強をしていたので理論的なことはわかっていました。それが実務でどう運用されているかを知ることができたのです。そして、複数の大企業を見ることでさらに理解が深まりました。とても貴重な経験をしたと思います。

監査法人に勤めて3年くらい経ったときに知人から外資系出版社の日本法人の経理・財務の責任者をやらなにか、と転職の誘いを受けました。実は、私は英語が大の苦手でした。大手監査法人にいたときにTOEICを受けさせられたことがありますが、400点しか取れなかったと記憶しています。これってどのくらいのレベルだろうと今回の講演前に改めて調べてみると中学卒業レベルだそうなんです。その程度の英語力ですが、減多にないチャンスで少し、自分への挑戦かなと思ってオファーを受けすることにしました。

この会社での仕事の一つに毎月親会社への決算と業績のレポートイングがあり、これが英語を習得するにあたってとてもいい勉強になりました。書いたら上司に見てもらって指導を受けていたのですが、2〜3カ月もすると書き方のコツがわかってきました。私の英語習得の8割がこのようなOJTです。残りの2割は、自分でテキストを見たりしていました。自分の中で特に力を入れたのは単語力の養成でした。単語力は絶対に必要です。

英語以外では外資系というよりベンチャー企業の経験をしたと言ったほうがいいかもしれません。会計処理の改善と、新たに経理規定を作成してそれを社内徹底させることに多くの時間を費やしました。会社のために良いと思っただけでは何でもチャレンジできる環境だったので、何もなかったところから会計をベースにしたルールや仕組みを作り上げる楽しさを知りました。

その後、現在の外資系企業に主計業務のマネージャーとして転職しました。3年後には同職種でさらに上位のポジションのオファーをいただいたのですが、それだと「今までの仕事の延長線上に過ぎない」と思い、その時に社内コンサルのような仕事もあると聞いたので、そち

らに異動することにしました。そこでは経営上のデータを駆使して担当役員と一緒に、商品の売り上げを伸ばすにはどうすればいいか、販管費を減らすにはどうすればいいか、人の適正配置をどうすればいいか、そのような企画立案をしてきました。ここでも充実した良い経験ができたと思います。そして今年の5月からはアジア太平洋地域の内部統制と会計ポリシーの責任者として、また新たな仕事にチャレンジしています。

## 「給料が高い」

外資系のイメージと現実について少しお話しします。まず「すぐ解雇される」。これは心配しなくて結構です。外資系といっても日本法人として設立されていますから、基本的にいきなり解雇ということはありません。

次に「給料が高い」。ハッキリ言って高いです。もちろん業種・職種・ポジションによって違いますが、日本企業の2〜3割増しくらいではないかと思っています。

そして「成果主義である」。確かにその側面は強いですが、成果主義であるということは年功序列ではない、ということですから、年下の上司、年上の部下、というケースはよくあります。日本の企業ですと結果が出なくても彼は社歴も長く残業も多くて頑張っているから評価してあげよう、という考えがあるかと思いますが、外資系企業では基本的にありません。逆に残業が多いと仕事ができ

ないと思われれます。短い時間の中でどれだけ効率を上げてアウトプットしているかを常に求められる社会です。

## 「周りの人から喜ばれる」

一般の事業会社で働く組織内会計士は、公認会計士という資格を軸にして色々な仕事にチャレンジできます。それは、財務経理だけでなく、経営企画営業、マーケティングなどステータスは幅広く、すべてが数字に関係するので公認会計士の知識は強みになります。そして、第三者的な立場から監査や指導を行う仕事と違って、自分が作成した企画や仕組みなどを多くに関係者の協力を得ながら白の手で実行する充実感があります。その結果、人が変わって、組織が変わって会社の価値が向上して、周りの人から喜ばれて、自分の給料が上がります。ごくハッピーなことですよ。これが、組織内会計士の一番大きな魅力ではないかと思っています。

最後にお伝えしたいことがあります。これから先、皆さんは色々な経験を積み重ね、様々な転機を迎えるでしょう。すべてが予想通りに進むものではないです。自分の「やりたいこと」もその時々によって変わって当然です。ですから、転機を迎えたときには自信を持って躊躇することなく、今「やりたいこと」に突き進んでください。大丈夫です。公認会計士には無限の可能性が広がります。本日はありがとうございました。



久保寺 大悟氏

公認会計士  
米国ワシントン州公認会計士  
公認情報システム監査人(CISA)  
大学3年時に公認会計士試験(旧2次試験)に合格。資格の大原公認会計士講座講師、大手監査法人、外資系出版社CFOを経て現在外資系事業会社に勤務。日本公認会計士協会組織内会計士協議会広報専門委員会専門委員。日本公認会計士協会東京会幹事。